活 動 名	団 体 名	高校生環境ネットワーク広島
高校生による「太田川学」研究	地　　域	広島県山県郡
	代 表 者	代表 竹本 伸
	支援金額	35万円

活動概要

「高校生環境ネットワーク広島」は、参加する高校生が広島の環境問題について様々な角度から研究することを通して、地域の環境を理解し広島という土地への愛着をより深めるとともに、「環境」をキーワードに学校をこえてつながっていくことで、広島における若者の自主的な活動の輪を広げていくことを目的として活動している。

2011年度は「太田川」をテーマに募集したところ、第1回に集まった高校生から「太田川を直に感じてみたい」という意見が多数出されたため太田川のカヌー体験を実施した。その結果、参加した高校生の多くが川の水質について強い関心を持ったので、今年度は水質調査を中心とした活動を行った。2回にわたり採水を行いその水質分析を行った後、講師を招いて水質分析の結果の数値をどう読み取りどうまとめればいいのかについて、講義とアドバイスをいただいた。それらの調査結果と分析、さらに1年間の活動を通して感じたこと等を「太田川学研究」として報告書にまとめた。

◆実施時期

2011年4月～2012年3月

太田川流域・広島市市役所会議室・広島市内公民館・広島市立工業高校等

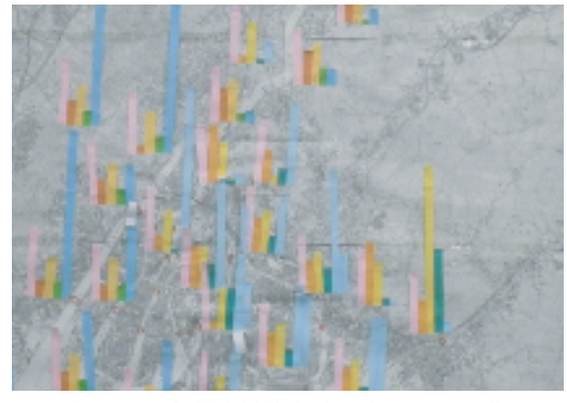
◆参加人数

高校生　15名、　　各校指導者　2名、

広島市地球温暖化対策地域協議会教育・学習ワーキンググループ　5名

参加総人員 22名

河川水の採水の様子



太田川の水質分析値を地図上でグラフ化
（2012年1月実施分）

水質分析風景

太田川カヌー体験

◆実施に伴う効果

① 高校生が自主的に活動内容を決め行動する事業であったため、高校生自身がいろいろと工夫や意見を出すことで、自主性や環境への興味・関心が大いに高まった。
② 高校生にとって、クラブ活動以外で他校の生徒と一緒に活動するという機会はあまりないため学校をこえた交流や互いのいい刺激につながった。
③ あるメンバーが、水の採水中に太田川漁協の方から声をかけられ、活動内容を説明したところ、「若い人たちが太田川に関心を持ってくれることは大変うれしい。報告書ができたらぜひ送ってほしい。漁協としても何かあれば協力したい。」と言われた。この調査をきっかけに、この活動が地域の方々と連携していけるようになれば、太田川等身近な地域の環境問題に対して、より多くの人に関心をもってもらえるようになるのではないかと考えている。

◆苦労した点

①広島市内及び近郊の高校に案内を配布して活動のPR・メンバーの募集を行ったが、学校への案内は生徒達の目に触れるところまで届くことがあまりなかったようで、結果的には昨年度から活動しているメンバーやその後輩が中心となった。このような学校をこえた高校生の活動についてのPRの難しさを痛感した。今後、こうした活動の輪を広げていくために、活動の社会的認知度をどう上げていくか、その効果的な手法の構築が大きな課題である。
②学校によって行事予定が違うため合同で集まれる日が限られており、日程調整が大変難しかった。(基本的には土曜日を活用した活動を考えていたが、広島市内の私立高校は土曜日も授業を行っているところが少なくない。)
③先例のあまりない活動であることと前述のような理由で日程調整が難しかったため、報告書の作成方法・内容に苦慮し、調査してから報告書の完成までかなり時間がかかった。

◆今後の課題・発展の方向性

①前述の「苦労した点」でふれているように、どのようなPRを行って活動メンバーを増やしていくか、特に、もっと多くの学校を巻き込んでいくためにはどのような方法が有効であるか、それがもっとも大きな課題である。
②「森は海の恋人」という言葉にもあるように、自然は全てつながっている。森と海をつなぐものがまさに川であり、特に広島の場合は、地域の代表的な産業である牡蠣養殖業の発展にとっても、欠かすことのできない重要な自然的背景となっている。それらのことを考えた場合、環境問題として地域の川を研究することは、自然のみならず産業や住民の生活など全てにつながっているという意味において、地域を総合的に見ていくキーワードになるうる対象であり、研究テーマを様々な方向に発展させていくことができると考えている。
③高校生が共通の関心のあるテーマについて、学校の枠を超えて集まり活動していくというこのような教育活動は、日本ではまだあまり見られない方法であるが、青少年の社会教育活動のスタイルとして、今後の新しいモデルになり得るのではないかと思っている。現在は、このようなやり方が社会に定着していないが故に様々なハードルがあるが、その一つひとつを具体的に整理する中で、このような新しい形の教育活動を少しずつ広げていきたいと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

①報告書の作成にかなり手間取ったため、2012年度はマツダ財団への助成申請が間に合わなかった。我々のような学校をこえた活動は予算的な裏付けがないため、貴財団の支援事業は大変ありがたいものであった。手前味噌であるが、貴財団の青少年育成事業の中でも青少年が自ら自主的に活動するという我々のような事業はそれほど多くないようなので、次年度以降はもう少し活動を計画的に行い、来年度以降、また助成申請をさせていただきたいと思っている。
②当初スタッフが考えていた「太田川学研究」は、様々な講義を受けたり文献等を高校生が自分たちなりに理解してまとめていくようなものを考えていたが、「川を実際に肌で感じたい。」という高校生の声を受けて、カヌー体験を行った。この体験がメンバーにとって、太田川をより身近に感じ、高校生なりの自分の感性で太田川に向き合うきっかけになった。頭であれこれ考えるより、まず体験してみるということが何よりも大事だということを学んだという意味において、大人のスタッフ自身も大変勉強になった。